



# コミュニケーション研究からみた日本語の記述文法の未来

定延, 利之

---

**(Citation)**

日本語文法, 11(2):3-16

**(Issue Date)**

2011-09

**(Resource Type)**

journal article

**(Version)**

Accepted Manuscript

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001953>



# コミュニケーション研究からみた 日本語の記述文法の未来

定延 利之 (神戸大学)

## 要旨

日本語の記述文法研究が、今後さまざまな外圧にさらされても研究の本質を失わず、さらに発展していくための方途について、コミュニケーション研究との交わりを題材として論じる。結論は4点である。

第1点。今後、日本語の記述文法研究は、マルチメディア技術の開発・普及を背景として、コミュニケーション研究との交わりをさらに深めていくだろう。

第2点。だが、日本語の記述文法研究にとって、コミュニケーション研究との交わりは、単に外発的なものではなく、自身のさらなる進展のために積極的に利用できるものである。「文法と音声の関わり」のような問題は、コミュニケーション研究との交わりの中でこそ追求することができる。

第3点。コミュニケーション研究と交わっていくには、日本語の記述文法研究じたいが変わらねばならない部分もある。「伝達一辺倒の発話行為観」「均質な話し手観」「静的な言語観」「規制としての文法観」などの前提には再検討を加える必要がある。

第4点。他方、コミュニケーション研究と交わっても、保ち続けるべき部分（内省を価値あるデータの一つとして尊重する態度）もあるので注意が必要である。

**キーワード：**マルチメディア、非伝達論的な発話行為観、役割語、発話キャラクター、動的言語観、「踏みならされてできている通り道」としての文法

## The Future of Descriptive Studies of Japanese Grammar: From a Communicative Perspective

SADANOBU Toshiyuki (Kobe University)

### Abstract

This paper discusses the ways in which we can further develop our descriptive studies of Japanese grammar, especially from a communicative perspective, without losing sight of its essence under various kinds of external pressure. The conclusions drawn are as follows:

- (1) Because of the development and spread of multi-media technology, we Japanese descriptive grammarians will have to have more and more active interchange with communication research in the future.
- (2) Although such active interchange may be extrinsic, we can positively utilize it for our own further development. Through this active interchange we can approach effectively many unsolved problems such as the interrelationship between grammar and speech.
- (3) Of course active interchange with communication study requires us to change ourselves to some degree. We must reconsider some research presuppositions including “transitional view of speech behavior,” “homogeneous view of speakers,” “static view of language,” and

“non-realistic view of grammar.”

- (4) On the other hand, even in active interchange with communication study, we should as much as possible preserve our attitude of esteeming introspection as a valuable type of data.

**Keywords:** multi-media, anti-transitional view of speech act, role language, speech character, dynamic view of language, grammar as “beaten paths”

## 1. はじめに

日本語の記述文法研究は、今後さまざまな点で外圧にさらされ、変革を迫られていくかもしれない。だとすれば、変革の波に吞まれて研究の本質を失うことなく、むしろ日本語の記述文法研究をさらに発展させるきっかけとして変革を利用するには、どうすればよいのか？——日本語の記述文法研究とコミュニケーション研究との交わりを具体的題材として、比較的最近の研究をもとに、この問題を論じる。

## 2. マルチメディア技術の開発・普及

日本語の記述文法研究がコミュニケーション研究との交わりを今後さらに深めると考えられる理由の一つは、マルチメディア技術の開発・普及である。

会話中の音声や映像を実時間で手軽に記録・処理できるツールの開発・普及は、ますます多くの文法研究者の関心を、文字言語の文法から音声言語の文法へと拡張・移行させ、結果的にコミュニケーション研究へと誘うだろう。

さらに、電子媒体での学術雑誌（たとえばアメリカ言語学会の *eLanguage* イニシアチブ *Journal of Experimental Linguistics*）の登場によって、論文においても、従来の紙媒体の学術雑誌では考えられなかった音声動画データの呈示が可能になっている<sup>1</sup>。

## 3. 文法と音声の交わり

日本語の記述文法研究にとって、コミュニケーション研究との交わりは、単に外発的なものではなく、自身が発展していくために必要なものである。というのは、そもそも文法はしゃべり方しだいで変わる部分があるからである。

たとえば、切符を落とした見知らぬ者に、そのことを教えてやる発話として、末尾に「よ」のない「もしもし、切符を落とされました」は不自然だということが井上優（1997）によって指摘されているが、この発話の不自然さは、やはり井上（同）で認められているように、しゃべり方しだいで軽減される。このようにしゃべり方の影響がはっきり示されることは従来珍しく、これまでの日本語文法研究では、しゃべり方への顧慮が十分になされていない。

文や発話の自然さに影響するしゃべり方としてはどのようなものがあり、どのような場合になぜ不自然さが軽減されるのか、従来の文法が前提にしていた「ふつうのしゃべり方」とはそもそもどのようなものなのかという問題は、コミュニケーションの研究との交わりの中で初めて正面から追求することができるだろう（定延利之（近刊）も参照）。

## 4. 伝達一辺倒の発話行為観の再検討

但し、コミュニケーション研究と交わっていくには、日本語の記述文法研究においてし

---

<sup>1</sup> 言語研究ないし文化研究におけるマルチメディア技術の導入の実際については岡田浩樹・定延利之（編）（2010）を参照されたい。

ばしば前提とされるいくつかの考えに再検討を加える必要がある。この節ではそれらの考えのうち、「発話行為は話し手の意図的な伝達である」という考え（伝達一辺倒の発話行為観）について述べる。

具体的に取り上げるのは、フィラー「さー」の「絶望性」である（定延利之 2005; 2007; 2010b）。「さー」は何事かを検討している最中に発せられるが、「さー」の後に話し手が続ける発言内容は必ず会話相手の期待に沿わず、この意味で「絶望的」と言える。たとえば次に挙げる X と Y の対話(1)では、X に対する Y の返答としては、(b)(c)は自然だが(a)は不自然である。

(1) X: あ、すみません、このあたりに交番ありませんか？

Y: さー, a. 交番はあの角を曲がったところにあります。

b. このへん交番はないですね。

c. ちょっとわかりません。

自然会話 100 時間の調査結果、小説・戯曲 60 作品の調査結果、被験者 102 名を対象としたアンケート調査、被験者 59 名を対象とした談話完成課題の結果すべてによって支持される「さー」の絶望性は、話し手が「さー」を発する時点で、「続いて発せられる返答の内容（つまり自分の検討の結果）は否定的なものだ」ということが話し手の心内ですでに確定しているということを示している。

このことは、「検討中に発せられるフィラー」という「さー」の位置づけを疑わしく思わせるかもしれない。そして、「さー」は検討中のフィラーではなく、検討が終了して相手に返答すべき内容が確定した後に「これからあなたにとって否定的な内容を言いますよ」という前触れのことばなのであって、話し手は聞き手が否定的な内容の発言を受け取るショックを和らげるために「さー」を発している、といった考え（以下「前触れ」説）がもっともらしく思えてくるかもしれない。

だが、実際には前触れ説は正しくない。そう考える根拠の第 1 点は、「さー」の後に検討中のフィラーが生じ得るということである。たとえば、次の事例(2)における、男性の発言「さーうーんー どこにあんにゃろねーんー」では、「さー」の後に「うー」「んー」「どこにあんにゃろねー(どこにあるんだろうねー)」「んー」ということばが続いている。もし「さー」を発する段階で話し手が「これからあなたに否定的なことを言いますよ」と言っているのであれば、その後に検討中のことばが現れていることは説明困難になってしまう<sup>2</sup>。

(2) 女性: ねーねー植民地にねー なる国とね ならない国の差ってのはどこにあると思う？

男性: さーうーんー どこにあんにゃろねーんー

根拠の第 2 点は、「さー」ということばが伴う非言語的動作である。「さー」はしばしばあごに片手をやる、腕を組むなどの、検討中におこなわれる動作と共に発せられる。

第 3 点は、「さー」の生起は必ずしも丁寧な印象をもたらさないということである。「さー」が「これからあなたにとって否定的なことを言いますよ」という前触れのことばであるなら、「さー」を発すればたいいてい状況でそれだけソフトで丁寧になりそうなものだが、たとえば家族から何か聞かれて「さー知らない」と答える場合、「知らない」と比べて丁寧という印象はない。

<sup>2</sup> この自然会話データは、科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業（CREST）プロジェクト「表現豊かな発話音声のコンピュータ処理システム」（2000-2004 年度、研究代表者：Nick Campell）により収録されたものである。ここでの書き起こしは簡略化してある。この会話断片における男女の発話は、ともに関西方言混じりのものだが、「さー」に関するかぎり共通語と変わらないという筆者の判断のもと、別扱いしていない。

以上3点の根拠で示したように、「さー」に関する前触れ説は正しくない。それにもかかわらず、我々がともすれば「検討中に発せられる絶望的なフィラー」という存在をいぶかしく感じ、前触れ説に惹かれてしまうとすれば、その原因は、我々が、コミュニケーションにおける発話というものを、意図的な伝達と片付けてしまい過ぎることではないか。たしかに「さー」は絶望的なフィラーだが、コミュニケーションの中で話し手の発話（「さー」）を聞いて外部者（聞き手）が或る意味（絶望性）を悟るとしても、その意味を無条件に「話し手が意図的に伝達したもの」と考えてよいわけではない。話し手が「さー」と言うのは、あからさまに失敗覚悟で検討しているだけであって、話し手が「さー」で相手に絶望性を伝えているとはかぎらない。

もちろん、話し手がコミュニケーションにおいてしゃべる音声、表情や仕草の映像は、相手の目や耳に（ごく常識的な意味で）「伝達」されるのであって、話し手があからさまにダメもとで検討するにしても、基盤にはやはりその意味での音声や映像の「伝達」がある。だが、その意味での「伝達」は、コミュニケーション以前の伝達である。たとえば海岸で一人、波の音を聞き、海の色を眺めるという、コミュニケーションではない単独行為においてもその意味での視聴覚情報の「伝達」は生じている。それに対して、ここで問題にしている「伝達」とはコミュニケーション行動としての伝達であり、コミュニケーション以前の「伝達」は問題にしていないということに注意されたい。

## 5. 均質な話し手観の再検討

これまでの日本語の記述文法研究においても、地域差・世代差・性差などの違いは認められているが、これまで認識されている以上に、文法は話し手によって異なる。その意味で、従来の均質な話し手観を再検討する必要がある<sup>3</sup>。発見の「た」を例にとって、このことを示す。

何かモノを発見して「あ、あった！」などと言うことがある。そのモノがいま現在、目の前に存在しているにもかかわらず、発見したというきもちのおかげで「た」が自然に感じられるので、この「た」は発見の「た」と呼ばれることもある。

発見の「た」については、「ひょっとしたらこのあたりにあるのではないか」といった事前の予期が必要か、それとも特に必要はないか、という争点がある。この問題に関して寺村秀夫（1984）では、事前の予期が必要ない実例として(3)が挙げられている。

- (3) この男は、他にもまだ妙な癖がある。自分の持ってる銭を、人の知らない間に石崖の穴かどこかに隠しておいて、「おや、ここに銭があった。こいつで一ぱい飲もう」と云って人に御馳走する癖がある。

『駅前旅館』（『井伏鱒二全集 第十八巻』筑摩書房。仮名遣いは現代風に改めた）ところが、(3)と同様の例を作っても、インフォーマントに広く受け入れられるわけでは必ずしもない。「あなたは友達と山の中にハイキングに行きました。ふと見ると目の前の崖に、まったく思いがけないことにサルがいます。あなたはサルを指さして、サルに気付かない友達に教えてやろうとします」と状況を設定した上で、「ほら見て、あんなところにサルがいたよ」という「た」の発言が自然かどうか大学生に判断させると、たいいて半数近くが「不自然」と答えてしまう。そのくせ、『駅前旅館』の「おや、ここに銭があった」は大学生にもよく受け入れられ、調査したかぎりほとんど全員が「自然」と判断する。

<sup>3</sup> 従来の研究の興味深い例外に、Iwasaki Shoichi (2005) の多重文法仮説 (Multiple Grammar Hypothesis) がある。この仮説によれば、文法は環境に応じて、その下位システムのうち一部だけを活性化させる。この活性化のパターンは小文法 (component grammar) と呼ばれる。たとえば「一塁におくる。俊足赤星一塁セーフ。ここで赤星の足」のような、一般の人々が言いそうもないスポーツアナの発言を生み出す『スポーツアナ文法』は、小文法の一つである。

つまり半数近くの大学生は、事前の予期なしの発見の「た」について、「自分は言わないが、古くさい『大人』の物言いとしてならOK」という判断を下している。このことは、山中ハイキングに『大人』を登場させてみるとよくわかる。たとえば「みんなで行きましょうよ」と、この山中ハイキングを決めたお節介な「お婆ちゃん」にしゃべらせてみると(4)を参照)、発見の「た」は極めて容認されやすくなる。

- (4) うわー、すごい紅葉じゃないですかーやっぱり来てみてよかったでしょー、どうです田中さん。ねー。騒音もないし、空気も綺麗だし、わ、見て見て、ほら、あんなとこにサルもいましたよどうですこれー。

このように、発見の「た」を事前の予期なしで発することができるかどうかは、話し手の人物像つまり発話キャラクタしだいの部分がある。

金水敏(2003)では、人物像と結びつけられる形で、役割語が(5)のように定義されている。

- (5) ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。 [金水敏 2003: 205.]

ここで述べたのは、役割語の範囲が意外に広大であって、発見の「た」のような、誰でも使いそうなものにも実は役割語としての側面があるということである<sup>4</sup>。

## 6. 静的な言語観の再検討

コミュニケーション研究と交わっていくには、伝統的に保持されてきた静的な言語観にも再検討が必要だろう。たとえば「次は三宮まで止まりません」や「彼のいいところはすごくやさしいんです」のような、現実の発話によく見られる呼応くずれを考えるだけでも、「時間の経過による話し手の意識の推移」を組み込んだ動的なものとして言語を考える必要のあることがわかる<sup>5</sup>。

静的な言語観がこれまで多くの成果を生みだしてきたことは否定しがたい。だが、言語能力と言語運用の境界、あるいはラングとパロールの境界がかつての力を失いつつある現在(酒井弘・定延利之 2006)、特にコミュニケーション研究と交わる文法研究において「言語は動的な過程である」(Wallace Chafe 2001)、「言語を記号としてとらえ、意味と形式の対応を前提とする考えでは、談話における主語や目的語の分析に困難が生じてしまう」(John Du Bois 2003)など、動的な言語観の有利が導かれていることもまた確かなことに思われる<sup>6</sup>。

## 7. 規制群としての文法観の再検討

これまでの文法は、語句や文の自然さ／不自然さを規則や制約によって説明しようとしてきたと言える。だが実際には、自然／不自然のラインは(ぼやけがちであることを別としても)しばしば入り組んでいる。その入り組んだラインに沿って、複雑な規制群を設け

<sup>4</sup> 発話キャラクタについて詳しくは定延利之(2011)、発見の「た」については定延利之(2008b)(2010a)、さらにSadanobu Toshiyuki and Andrej Malchukov(2011)を参照されたい。

<sup>5</sup> 文だけでなく語についても、発話の進行を考慮しなければ説明できない現象は見られる。接ぎ木語(たとえば[総務部の部長]を意味する語「総務部長」)に関する定延利之(2001)、定延利之・黄麗華(2004)を参照のこと。動的な言語観については定延利之(2000)も参照されたい。

<sup>6</sup> 動的な言語観といえば日本語文法研究では時枝誠記(1941; 1955)の「言語過程説」が広く知られているが、動的な言語観が言語過程説のような強い目的論にかぎられるわけではない。

ることはできるとしても、その規制群は、語句や文を発する話し手にとってどれだけリアルなものだろうか。たとえば、開始時点を意味する「から」を含んださまざまな文(6a-g)を見られたい。

- (6) a. 2時から部屋が青い。
- b. 2時から部屋が青くなる。
- c. 部屋が青いのは2時からだ。
- d. 2時から部屋が青かった。
- e. 朝から腹が痛い。
- f. 夜から腹が痛い。
- g. 昨夜から腹が痛い。

これらのうち、(a)は不自然だが、(b)よりもさらに不自然である以上、(a)の不自然さをもっぱら言語外世界の事情(部屋の色はふつう時間単位では変化しないということ)のせいにはすることはできない。(c)のように[前提-焦点]構造にすると自然で、(a)もその意識でとらえれば不自然さが軽減されること、(d)のように過去にしても不自然さが軽減されること、(e)のように体感度の高い文なら完全に自然であることを考え合わせれば、「から」が意味する開始時点とは、「知識」の表現であることがはっきりしている場合は状態の開始時点でもデキゴトの開始時点でもよいが、通常の場合はデキゴトの開始時点ではなければならない」といった規制が設けられるかもしれない。そして、(c)は[前提-焦点]構造を持ち、「知識」の表現であることがはっきりしているので「から」は状態[部屋が青い]の開始時点を表せるが、通常の場合は「から」はデキゴトの開始時点しか表さず、[部屋が青い]のような状態はデキゴトではないので(a)が(b)よりも不自然という説明がなされるかもしれない。また、(e)は「知識」ではなく「体験」の表現で、状態[腹が痛い]がデキゴト化されるために自然、(d)の過去形は「体験」の表現と似つかわしいので多少自然という説明がなされるかもしれない。だが、その「体験」の表現にしても、「朝」を(f)のように「夜」にするだけで自然さが低下し、「昨夜」にすると(g)のように自然になることにはさらに説明が必要である。人間一般の生活サイクルや直示性の観点からみて「朝」「夜」「昨夜」が異なっていることに基づいて、「体験」の表現に現れる起点表現は、人間の生活サイクルからみてありそうな時点を表し、直示性が高くなければならない」といった規制を設けることは可能ではある。しかし、(d)の「2時」が(それじたいとしては)直示性が低い表現であり、午前2時を表す場合と午後2時を表す場合で(d)の自然さの違いがはっきりしないことからすれば、規制群は(たとえば(d)の時制が過去であることに着目した)さらに複雑なものにする必要がある。このような複雑な規制群は、話し手が「守る」ものではないだろう。話し手にとっての文法とは、規制群(べからず集)としてではなく、むしろ、自然に身を進ませる「踏みならされてきている何本もの通り道」のようなものではないだろうか<sup>7</sup>。

さらに言えば、自然/不自然のラインの「入り組み」方を観察することで、文法とコミュニケーションの分かちがたいつながりが見えてくることもある。というのは、「体験」の文は「話としてそれなりに面白くないと不自然」という、コミュニケーションに密着した性質を持っているからである(定延利之 2008a)。たとえば、「レストランがあちこちにある」という意味で「レストランがしょっちゅうある」と言いやすいのは、レストランのありかを熟知した(7a)のような場合ではなく、(7b)のような『探索』を中核とするそれなりの「冒険譚」である。

<sup>7</sup> 「文法というものはない。あるのは文法化だけである」(Paul Hopper 1987)という考えも、ここで述べる文法観に近いとすることができる。

(7) a. ??うちの近所にはレストランがしょっちゅうあります。

b. [見知らぬ外国の街をうろついた際の様子を話している]

それで、なんか、レストランがしょっちゅうあるのね。

またたとえば、或る料理を品評した(8a)の「苦い」に付けられる修飾語句としては、(8b)の「ただもう」のような程度を強めることばが自然で、(8c)の「やや」のような程度を弱めることばは不自然、つまり「苦いばかり」の話は『体感』を中核とするそれなりの「大事(おおごと)の話」になっていなければならない<sup>8</sup>。

(8) a. 苦いばかりで少しもおいしくない。

b. ただもう苦いばかりで少しもおいしくない。

c. やや苦いばかりで少しもおいしくない。

## 8. 内省尊重の姿勢保持

もともと、コミュニケーション研究と交わっても、日本語の記述文法研究が変わってはならない部分もある。それは、内省を尊重する姿勢である。従来から批判されているとはいえ、文法研究は実際のところ内省なしにはおこなえない。他方、コミュニケーション研究の領域にかぎらず、文法研究の周辺領域は、心理／脳実験、コーパスを用いた計量分析、自然会話データなど、内省以外の手法を重視している。それらの領域と交わることで、文法研究者が得るものは少なくないだろうが、文法研究者が数値化されたもの、目に見えるものだけを語るようになり内省を顧みなくなることは、文法研究の本質を危うくするものと言える。今後、内省軽視の圧力が「科学」の名のもとにますます強まるとすれば、若い研究世代にかぎらず我々にとって、内省尊重の姿勢は、当たり前のもではなく、「戦い」によって勝ちとらねばならないもの変わってくる可能性がある。あるいは、そのような認識は現時点においてすでに必要なかもしれない。

## 9. まとめ

ここでは、日本語の記述文法研究が今後、さまざまな変革の波に呑まれても研究の本質を失うことなく、むしろさらに発展していくための方途を、日本語の記述文法研究とコミュニケーション研究との交わりを具体的題材として論じた。結論は以下4点である。

第1点。今後、日本語の記述文法研究は、マルチメディア技術の開発・普及を背景として、コミュニケーション研究との交わりをさらに深めていかざるを得ないだろう(第2節)。

第2点。だが考えてみると、日本語の記述文法研究にとって、コミュニケーション研究との交わりは、マルチメディア技術のような外因のためにおこなわねばならないというよりも、むしろ日本語の記述文法研究がさらに進んでいくために積極的に利用できるものである。「文法と音声の関わり」のような未解明の問題の検討は、コミュニケーション研究と交わる中でこそ追求されるべきものである(第3節)。

第3点。コミュニケーション研究と交わっていくには、日本語の記述文法研究じたいが変わらねばならない部分もある。「伝達一辺倒の発話行為観」「均質な話し手観」「静的な言語観」「規制群としての文法観」などの前提には再検討を加える必要がある(第4節～第7節)。

第4点。他方、コミュニケーション研究と交わっても、保ち続けていかねばならない部

---

<sup>8</sup> このような「話としての面白さ」を、「情報としての重要さ」のような情報伝達的な観点でまとめ上げようとするのは、かえって問題をぼやけさせてしまう。たとえば(7)では、話し手の家の近所におけるレストランの分布情報よりも、海外の或る街をうろついた際のレストランの分布情報が重要とはかぎらない。

分（内省を価値あるデータの一つとして尊重する態度）もあるので注意が必要である（第8節）。

**謝辞：**この論文は、日本語文法学会第11回大会シンポジウム「日本語の記述文法の未来を考える」（2010年11月6日、於就実大学）における同名の発表を紙面の都合で大幅に短縮した上で、それに若干の改訂を施したものである。発表に対して有益なご意見を下さった方々に感謝したい。また、投稿原稿に対して有益な助言を下された匿名の査読者にもお礼申し上げたい。頂いた全ての助言を紙面に活かすことはできなかったが、これらは今後の研究の参考にさせていただきたい。この論文は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)（課題番号：19202013、研究代表者：定延利之）の成果の一部である。

## 言及文献

- 井上 優（1997）「もしもし、切符を落とされましたよ——終助詞「よ」を使うことの意味——」『言語』26-2, pp. 62-67.
- 岡田浩樹・定延利之（編）（2010）『可能性としての文化情報リテラシー』ひつじ書房.
- 金水 敏（2003）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店.
- 酒井 弘・定延利之（2006）「日本語文法学会の展望」（「展望 2：理論的研究」）『日本語文法』6-1, pp. 159-167.
- 定延利之（2000）『認知言語論』大修館書店.
- 定延利之（2001）「出来事としての語——接ぎ木語の動的構造をめぐって——」音声文法研究会（編）『文法と音声Ⅲ』くろしお出版, pp. 83-105.
- 定延利之（2005）『ささやく恋人，りきむレポーター——口の中の文化——』岩波書店.
- 定延利之（2007）「話し手は言語で感情・評価・態度を表して目的を達するか？——日常の音声コミュニケーションから見えてくること——」『自然言語処理』14-3, pp. 3-15.
- 定延利之（2008a）『煩惱の文法——体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話——』筑摩書房.
- 定延利之（2008b）「日本語研究と海外の言語研究のコラボレーション」『日本語学』27-14, 明治書院, pp. 28-38.
- 定延利之（2010a）「「た」発話をおこなう権利」日本語／日本語教育研究会（編）『日本語／日本語教育研究』1, pp. 5-30.
- 定延利之（2010b）「会話においてフィラーを発するということ」『音声研究』14-3, pp. 27-39.
- 定延利之（2011）『日本語社会のぞきキャラくり——顔つき・カラダつき・ことばつき——』三省堂.
- 定延利之（近刊）「音声コミュニケーション」益岡隆志（編）『はじめて学ぶ日本語学』ミネルヴァ書房.
- 定延利之・黄麗華（2004）「日漢“畳合詞”的対比研究」《現代中国語研究》編輯委員会（編）『現代中国語研究』6, pp. 15-21.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店.
- 時枝誠記（1955）『国語学原論 続篇』岩波書店.
- Chafe, Wallace. (2001) “The analysis of discourse flow,” *The Handbook of Discourse Analysis*, Blackwell, pp. 673-687.
- Du Bois, John W. (2003) “Discourse and grammar,” *The New Psychology of Language* 2,

Lawrence Erlbaum, pp. 47-87.

Hopper, Paul J. (1987) "Emergent Grammar," BLS 13, pp. 139-157.

Iwasaki, Shoichi. (2005) "Multiple-grammar hypothesis: a case study of Japanese passive constructions," *Phylogeny and Ontogeny of Written Language*, Kyoto University, August 17, 2005.

Sadanobu, Toshiyuki and Malchukov, Andrej. (2011) "Evidential extension of aspecto-temporal forms in Japanese from a typological perspective," Tanja Mortelmans, Jesse Mortelmans and Walter De Mulder (eds.), *In the Mood for Mood (Cahier Chronos 23)*, Amsterdam; New York: Rodopi, pp. 141-158.

(最終原稿受理日 2011年5月17日)